



清らかで美しい歌声のかげに

松本 侑壬子・ジャーナリスト

“歌う尼さん”とか“ドミニク、ニク、ニク…”と聞いて、ああ、とすぐにあの忘れ難いメロディーが思い浮かぶのは、今では相当の年配者と言わねばならないだろうか。

記録によると、日本でこの歌『ドミニク』が大ヒットしたのは、1964年、東京オリンピックの年だった。TVで姿が映るわけでもなく、スール・スーリール（微笑む尼僧＝匿名）の美しい歌声だけで幸せな気持ちになった。

本作は、この修道院生まれの、世界でも稀な大ヒット曲の作者＝歌手、本名ジャニーヌ・デッケルス（1933年～1985年）の生涯を描く。清らかで美しい歌声の主の、あまりに切ないその一生には、胸が詰まる。悲しみの底に、なんとさまざまな人生の諸相が、プリズムのように垣間見られることであろうか。

時代は1950年代の終わり、ベルギー・ブリュッセル近郊。ジャニーヌ（セシル・ド・フランス）は自由で活発な女学生だった。学校で聞いた修道女の、アフリカの子どもの救援活動の話に感動し、いつかは自分も、と胸をふくらませる。パリの美術学校を出て美術教師となったが、支配的な母は早く手近かな青年との結婚を迫るばかりで、ジャニーヌの話に耳を貸さない。諍いの末に心の安定を求め、ジャニーヌは自ら修道院への道を選ぶ。「二度と戻るな」との母の罵声を背に、

大切なギターとエルビス・プレスリーのプロマイド(?)を忍ばせたトランクを手に家を出る。

だが、修道院では修道女になるには6年間の修業が必要であり、ギターも取り上げられてしまう。厳しさに反発しては問題を起すのが、率直で邪気のない性格を理解する院長らのおかげで、ギターを弾くことを許される。ジャニーヌは修道院の庭に立つ銅像の主、聖ドミニコを讃える歌をつくる。

その歌が、欧米から日本まで、世界中で爆発的ヒットとなったのは、私たちも知る通り。だが、歌がどんなにヒットしても、印税は契約上すべて教会へ寄付され、本人の手には入らない。その上、テレビで公演活動をしたいと発言したり、中絶賛成の歌『黄金のピル』が宗教論争を引き起こすなど物議をかもし、一時音楽活動を停止、修業に専念する。が、3年後には音楽活動を再開するため還俗する。

「好きな歌で神のメッセージを伝えたい、社会の役に立ちたい、そのため制約の大きい修道院から自由になりたい」というジャニーヌの願いは、なぜかうまくいかない。新しい歌も自分の名前で出せない、公演も成功しない。何とかしようと、マネージャーにわが身を投げ出しさえする姿が痛々しい。行き場のないジャニーヌを迎え入れ、命尽きるまで添い遂げてくれたのは、親友アニーだった。だが、世間は同性愛を疑い、スキャンダルに。政府からの巨額の追徴課税が追い打ちをかける。そして、ついに…。

ジャニーヌの悲劇は、なぜ起こったのか。余りにも純粹で、無防備で、夢追い人だったからなのか。コニックス監督は、「抑圧の時代の中で愛と自由を必死で求める姿を描きたかった」と述べているのだが。

『シスタースマイル ドミニクの歌』

仏・ベルギー合作映画（124分）／ステイン・コニックス監督

7月上旬より シネスイッチ銀座他全国順次ロードショー

©2009 PARADIS FILMS - LES FILMS DE LA PASSERELLE - EYEWORKS
FILM & TV DRAMA-KUNST & KINO

